



Title	個人主義と共同体のあいだ：芸術家グループ〈ブリュッケ〉と「ドイツ表現主義」をめぐって
Author(s)	大森, 淳史
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51837
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (大 森 淳 史)	
論文題名	個人主義と共同体のあいだ —芸術家グループ〈ブリュッケ〉と「ドイツ表現主義」をめぐって—
論文内容の要旨	
本論の中心をなすのは、1905年にドレスデンでわずか4人のメンバーによって結成され、1911年末にメンバー全員ベルリンへ移住したのち、内部分裂から1913年に解散した小さな芸術家グループ〈ブリュッケ〉の研究である。これが本論第2章をなしている。〈ブリュッケ〉は、それ以降の美術批評のなかで、同じ時代ミュンヘンにいたカンディンスキーを中心とする〈青騎士〉グループとともに、第1次世界大戦前の「ドイツ表現主義」の中心的グループと位置づけられていった。また、同時期に起こったフランス、パリの「フォーヴ」とは併行現象であるともされてきた。 〈ブリュッケ〉が特徴的であるのは、一つには、同じ大学（ドレスデン工科大学）に所属する3歳違いの2人ずつの親友同士のペア（フリッツ・ブライルとエルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー、およびエーリヒ・ヘッケルとカール・シュミット-ロットルフ）が、一方のペアの一人（キルヒナー）ともう一方のペアの一人（ヘッケル）の兄とが同じ学校（ケムニッツ市立レアルギムナジウム）の同級生だったという間柄によって結びついたという事情もあるが、「同胞愛的（brüderlich）」な強い関係によって結束していたという点である。メンバーはしょっちゅう集まって議論し、いっしょに制作した。議論の内容は、芸術のことはもちろん、文学、哲学など、多岐にわたった。絵画や絵画以上に力を入れた版画、ことに木版画は彼らの最重要関心事ではあったが、彼らは、自分たちが試みた新しいかたちの芸術創作を通じて、生（das Leben）そのものの刷新を意図した。彼らがいわゆる純粋芸術の範囲を超えて、広く装飾美術に関心を示したのは、そうした彼らの意図からだった。そこには、彼らが美術アカデミーで学ぶという本来の希望を曲げて進まざるをえなかった工科大学で接した新しい装飾芸術ないし空間芸術の理念も大きく影響していたと考えられる。 しかし、これら〈ブリュッケ〉グループの特徴、すなわち小さな共同体のなかでの同胞愛的結びつきとか、装飾芸術への関心とか、さらには、新たな芸術創造が生そのものの変革につながるという高揚感と一種の使命感などは、この小さな芸術家グループを超えて、ある程度同時代的広がりをもった傾向だった。それは、ミュンヘンにいたカンディンスキーたちにも同様に当てはまる傾向だったといえる。ただ、観念的傾向の強いカンディンスキーたちの場合には、19世紀末から広く知識階層にアピールした神秘主義思想の影響もあり、芸術の刷新が世界の再生という壮大な観念と結びついて行った点が異なっていた。 こうした、〈ブリュッケ〉グループの特徴を考えていく場合、1900年前後の時期にドイツで広まっていた文化批判や各種の改革運動と関連づけて理解していくことが重要と考える。この時代、ヨーロッパ、ことにその中央に位置するドイツでは、工業化および都市化と大衆化が急激に進行した。ことに1888年に即位したヴィルヘルム2世の治世に、ドイツは重化学工業を中心に飛躍的な発展を遂げ、1900年になる頃にはアメリカに次いで世界第2の工業国となっていた。それに伴い、急激な都市化と文化の大衆化も進行した。また、1870年の普仏戦争の勝利ののち高まるドイツの自信は、一方で隣の文化先進国フランスに対する捻れた敵愾心を生むとともに、他方急激な工業化、都市化、大衆化は、自国の社会と文化全般への強い危機感をも生み出していった。そうした危機感、ことに古典教育中心のギムナジウム卒業者を中心とするドイツ特有の教養市民階層とよばれる中間階層のあいだに強かった。そうしたなか、ヴィルヘルム2世が祖父の代からの宰相ビスマルクを事実上罷免して親政を敷いた1889年の初めに狂気の闇のなかへと入り込んだニーチェの思想が、まさに精神の薄明のなかから時機を得て立ち現れ、人々の心を強くつかんだ。ニーチェと併行し、またニーチェに触発されながら、より平俗な思考と言葉とで文化批判を説く、ポール・ド・ラガルドやユリウス・ラングベーンらの混乱した書物が、平俗である分、ニーチェにまして広く人々に読まれた。そうした文化批判の論者たちは、宗教と教育におけるドイツの伝統を激しく批判し、ドイツ文化の危機を煽るとともに、ドイツ的精神の始原へと立ち返ることによる文化的再生とドイツの精神的、文化的優位性を訴えた。それら保守的文化批判は、19世紀後半のヨーロッパ人を震撼させたダーウィンの進化論を人間社会に応用した社会ダーウィニズムとも結びついて、民族主義や人種主義へと傾斜していくことが多かった。	

またこの時代、そうした激しい近代化の流れに抵抗して、それとは別の (alternativ) 方向を模索する実践運動がいくつも現れた。すなわち、ワンダーフォーゲルなどの青年運動、都会を離れた自然豊かな土地にコロニーを形成して、束縛されない自由な生き方を試みる入植運動、多くはそれと合体した菜食主義や裸体文化運動などの生活改革運動、型にはまった古典教育を廃し、自由な個性の伸張を促すことを目指す教育改革、より計画的に生活条件の改善を図る土地改革運動や田園都市運動などである。神智学など、同時期にヨーロッパ規模で流行を見た各種の神秘主義思想がそれらに混じりあった。さらに、1900年に近づく頃、本来急激な方法で理想社会実現をもくろむ非現実的政治思想であるアナーキズムは、すでに大方は過激な革命理論、革命運動としての毒牙を失っていたが、その分融通の利く反抗の思想として、そうしたalternativな生き方と社会のあり方を模索する人々の心を惹きつけ続け、各種の改革運動や神秘主義思想とも広く結びついた。

そうした状況が、1905年の〈ブリュッケ〉グループ結成の下地として存在した。彼らは、当時の知的な若者として、当然のようにニーチェの個人主義を自分たちのものとして受けとめ、また裸体文化運動、青年運動、入植運動など、alternativな生き方を追求する改革運動のスタイルを自分たちの制作方法や生活方法のなかに取り込むとともに、従来の、権威主義的で、資本主義社会と深く結びついた制度を極力避けつつ芸術活動を実践していく方法を模索していた。それは、アナキストたちが思い描いた、個人の自由を最大限尊重しつつ、平等で、いっさいの権威を排した小さな規模の共同体のスタイルに良く似ていた。本論では、第1章でまず、〈ブリュッケ〉グループが生まれる下地をなした1900年前後の時期の文化批判と各種改革運動を通覧していくこととする。ことに、それらと、反抗の思想としてのアナーキズムとの接点に注目していく。

アナーキズムが矛盾を含んだ非現実的政治思想であったように、〈ブリュッケ〉もまた、矛盾の上に成り立っており、短命だった。ドレスデンに残っていた3人の〈ブリュッケ〉創設メンバーがベルリンへ移住する1911年末頃から、美術批評のなかに「表現主義」という言葉が登場し、当時の前衛美術を包括する用語として次第に力を持ち始めた。第1次世界大戦を目にした頃になると、この用語は保守的文化批判などを通して広まっていた民族主義的論調と結びつき、ドイツ的精神性のしるしを帯びたドイツの民族的、国民的な芸術傾向という性格づけがなされるようになっていった。そうした論調の影響は、〈ブリュッケ〉末期における彼らの言動にも現れてくる。そうしたことも、振り返ってみれば、〈ブリュッケ〉を生む下地のなかにすでに内包されていたことだったといえる。各種の改革運動も、一方で国境など眼中にない自由な個人主義者たちの運動であるとともに、他方でゲルマン民族主義や人種主義と結びつく傾向をも持っていたのである。じっさい、その実践家たちの多くは民族主義者で人種主義者だった。ことにフランスの捨てた精神的、文化的優越論も、「ドイツ表現主義」の議論のなかで噴出した。そうした論調は、キュビズムや未来派との関係のとり方にも影響を及ぼすこととなった。

「表現主義」という名前を与えられた創作活動そのものは、第1次世界大戦敗戦直後の11月革命の熱狂が冷めるとともに急速に収束した。しかし、ヴァイマル時代全体を通して「表現主義」はなお同時代美術を代表する「国民的」芸術という扱いを受け、美術館において継続的に収集、展示された。そこには、芸術による上からの美的教化という、ドイツに伝統的な傾向の現れを見ることができる。「大衆の国民化」というナチスのスローガンは、じつはヴァイマル時代の美術館を中心とする「表現主義」推進の国民教育の方向性にもある程度当てはまるものだったのである。じっさい、ナチス内部にも当初表現主義支持者は存在した。しかし、そうした美的エリートの教育的思惑の一方で、郷土芸術運動などと結びついた民族主義的な反近代美術の声は依然として根強く存在した。また、そうした声の方が大衆には圧倒的にわかりやすかった。次第にナチスの影響下にある「ドイツ文化のための闘争同盟」による同時代美術への破壊活動が頻発するようになり、最終的にはヒトラーの指導の下、「退廃的」との烙印を押され、一掃すべき対象とされるに及んで、その生命を終えた。

こうした1910年代前半からヴァイマル時代に至る「表現主義」をめぐる議論のなかで、〈ブリュッケ〉は、ノルデ、バルラッハとともに、「ドイツ的本質 (Deutschtum)」を体現する芸術たる「ドイツ表現主義」の中心に位置づけられた。本論の第3章は、美術批評や文学批評のなかで「表現主義」概念が次第にゲルマン化していく過程と、ヴァイマル時代における美術館を中心とする「表現主義」美術の取り扱い、およびそれがナチスによって弾圧されていく過程を考察する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (大 森 淳 史)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	上 倉 庸 敬
	副 査	大阪大学 教授	藤 田 治 彦
	副 査	大阪大学 教授	園府寺 司
	副 査	大阪大学 准教授	三 宅 祥 雄
	副 査	大阪大学 准教授	田 中 均
	副 査	會津八一記念館 館長	神 林 恒 道

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：個人主義と共同体のあいだ

ー芸術家グループ〈ブリュッケ〉と「ドイツ表現主義」をめぐってー

学位申請者 大森淳史

論文審査担当者

主査	大阪大学	教授	上倉庸敬
副査	大阪大学	教授	藤田治彦
副査	大阪大学	教授	罔府寺司
副査	大阪大学	准教授	三宅祥雄
副査	大阪大学	准教授	田中均
副査	會津八一記念館々長		神林恒道

【論文内容の要旨】

〈ブリュッケ〉は、1905 年ドレスデンで 4 人のメンバーによって結成され、1911 年末のベルリン移住をへて、内部分裂から 1913 年に解散した小さな芸術家グループ。以後の美術批評はこのグループを、ミュンヘンにいたカンディンスキーら〈青騎士〉グループとともに、第 1 次世界大戦前「ドイツ表現主義」の中心に位置づけ、同時代フランスのパリ「フォーヴ」に併行する現象を担ったと見なしている。本論文はその〈ブリュッケ〉の研究である。体裁は A4 判、目次・本論・註をあわせて全 211 ページに、図版 139 葉を附す。本文 1 ページは 36 行、1 行は 40 文字で、文字数は約 30 万 1000、400 字詰め原稿用紙ほぼ 750 枚に相当する。

全体の構成は、「はじめに」で本論文のテーマと先行研究、および〈ブリュッケ〉をとりあげた現在までの主要展覧会を考察する。以下「第 1 章. 1900 年前後における文化批判と改革運動」、「第 2 章. 個人主義と共同体のあいだー芸術家グループ〈ブリュッケ〉を中心に」、「第 3 章. 国民芸術か、退廃芸術かー「ドイツ表現主義」をめぐってー」、「おわりに」とつづく。各章のタイトルは如実にその主題を示している。論旨に即して要約する。

本論文の第 1 の意図は、芸術家グループ〈ブリュッケ〉を中心に 1900 年代初頭ドイツの芸術運動を、1900 年前後の時期の、ことにドイツにおける文化史的、精神史的、社会思想的背景との関連において考察することにある。背景のうち特に次のことに注目する。ドイツ文化の危機を訴えた保守的文化批判、共同体的連帯のなかでの実践運動を通して人間の自然的本性の回復と自己の内的革新を期する入植運動、青年運動、裸体文化運動などの生活改革運動、世紀の変わり目ごろまでには毒牙を抜かれて知識人と芸術家には融通の利く反抗思想となっていたアナーキズム、さらには工芸から工業デザインへの途上にあった建築および工芸における改革運動である。

見出した諸関連を、〈ブリュッケ〉の特徴的な点に結びつけて分析する。その諸特徴とは、芸術と生活を既存の規制から解放しつつ一体化するという姿勢、装飾芸術ないし空間芸術とのかかわり、木版画を中心とするグラフィックへの執着、同胞愛的連帯にもとづく小共同体としてのグループの性格と際立った展覧会活動である。

第 2 の意図は、時代的背景のなかに内在していた民族主義的論調が、第 1 次世界大戦の少し前ごろから〈ブリュッケ〉を筆頭として「表現主義」をめぐる議論のなかに現れてきて、「表現主義」に「ドイツの本質」を体现す

る「国民的芸術」という性格づけが付与されるようになるとともに、それがやがてナチスの近代芸術攻撃の矢面に立つ、そこに至る経緯をたどることである。

論旨全体を貫いているのが、タイトルにもある、個人主義と共同体への志向との緊張した関係への視点である。ここにいう個人主義は、ニーチェの急進的貴族主義およびシュティルナーの「唯一者」へと結び付けられつつ、1890年代以降のドイツでしばしば語られた概念である。ことにヴィルヘルム2世治下の政治・社会情勢への失望から、芸術家の生がこの個人主義の要求を一手に引き受けるようになった。この個人主義は、個人を越えた共同体へ向かうという矛盾した傾向を同時にもっていた。芸術家グループ〈ブリュッケ〉にはそうした矛盾が典型的に見られる。その矛盾を、パトスと同胞愛に満ちた共同体体験が解消していた。

ただし、共同体への志向は、一方で往々にして「ドイツの本質 (Deutschtum)」を核とする民族共同体のような民族主義的観念へと結びつくとともに、また他方であらかじめ約束された世界の調和といった神秘主義的観念へと通じていく傾向をも具えていた。そうしたことは、1900年前後の時期のさまざまな文化批判や各種の実践運動のなかにすでに見られたが、第1次世界大戦前後の「表現主義」をめぐる議論のなかにも現れた。やがてナチスがそうした傾向をすくいとり、大衆煽動へと利用していった。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の成果にまず挙げるべきは、1870年から1934年までのドイツにおける芸術事象をとりあげて、ドイツの本質 Deutschtum とよばれるものの確固たる手応えを浮かびあがらせたことであろう。ニーチェとシュティルナーの著述から「貴族主義」および「個人主義」という抽象概念を導きだし、それを作業仮説として個々の具体事例を精密に分析し、その仮説を適用、ないし、そこから仮説を逆に析出する。その結果、およそ60年をこえる歴史のなかで、貴族主義および個人主義が、具体事象から形づくられた、きわめて抽象度の高い Deutschtum に変貌するプロセスを、本論文をとおしてわたくしたちは目の当たりにすることができる。それは、ドイツが普仏戦争で文化先進国フランスに勝利をおさめたときから、ニュルンベルク第6回党大会でヒトラーが民族主義にもとづくアンチ現代芸術の声をあげて大衆をひきつけたときまでの65年である。抽象か具象か、どちらかでしか語りにくい時間だったので、この成果をへてはじめて、少なくとも芸術学上、わたくしたちはこの時代を思想検討の対象とすることが可能になった。

ついで挙げるべきはもちろん、詳細な文献と洩れのない展覧会精査によって〈ブリュッケ〉の全体を残る限なく研究し尽くしたという、芸術史学上の成果である。具体から抽象へ志向しつつも〈ブリュッケ〉作品の「形」に対して論者の目は周到であり、たとえばフィドゥス「光の崇拜」が示す形態の系列は些細な点までたどられ、またたとえば民族の意匠は当時ひらかれた民族ショーの絵葉書を含めて際限ないほどに追尋される。その上で、世紀末以来のアナーキズム、ユダヤ人問題、作家の出身階級といった問題が論じられる。重要事で扱われていないのは金銭の動きであろうか。

成果を挙げていけば切りがない。本論文は時代のドイツを論じて、叙事と叙情のなかに光と影が相半ばする人間の運命さを感じさせる。かちえた自信の蔭で、フランスへの屈折した敵愾心にあおられ、急激な工業化がもたらす都市化と大衆化に難渋しながら、〈ブリュッケ〉のドイツは、個人をのりこえる共同体を体験する。それは「かつて神秘主義者、千年王国論者をも支配していたような、あの非歴史を思わせるなにか、あの忘我の一点」だったと、論者はマンハイムの言葉を引用する。そこに、希望をもたらすはずだった共同体への契機が結局はヒトラーに篡奪されてしまったという、論者の取り返しのつかない思いが滲み出る。

本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと認定する。